向野田古墳

宇土市埋蔵文化財調査報告書第２集

1978

熊本県宇土市教育委員会

序

宇土地方の前方後円墳は昭和40年ごろまでは、古保山の女夫塚の男塚のみであった。それも30年代のはじめ頃、附近の橋をかけるための土取りで、道路側がこわされ、石室が露出し、転落してしまった。ひそかにこの古墳の調査を計画しておられた第二代肥後考古学会長の小林久雄氏を歎かせたものであった。

それが昭和39年ごろから、蜜柑畑造成のために宇土半島基部の山がひらかれ、ことに小天・河内の業者によって大規模になされると、次々に大前方後円墳が発見された。昭和40年8月に、それらのなかでももっとも破壊の甚しい不知火町の弁天山古墳が、富樫卯三郎氏を中心とする宇土高校社会部によって発掘調査されている途中で、もっとも壮大な容姿をもってスリバチ山古墳が発見され、その東前面に迫ノ上古墳があることが分かった。

かくして宇土半島基部の前方後円墳は女夫塚のほか、弁天山・国越・スリバチ山・迫ノ上・城ノ越・仁王塚・天神山・松橋大塚・向野田・楢崎などに及び、さらにさいきんは向野田古墳の東に御手水(おちょうず)古墳が発見された。12基に及ぶのである。そのうち破壊のために弁天山、迫ノ上、国越が発掘調査され、城ノ越(じょうこし)は私どもが中世の城跡と見誤ったために、ブルドーザーで崩され、その途中、古い前方後円墳を中世に城に改造していることが分かったが、三角縁神獣鏡一面のほか、主体部も遺物も不明のまま終った。

向野田古墳は国道三号線のすぐ東側で、不知火町との境に近いところにあるが、藪が深いために発見がおくれた。それが古墳であると分かったのは、昭和41年夏で、現宇土市教育委員会の平山主事（当時高校生）によるが、雑木が密生していて調査は不可能であった。しかるに翌42年夏には同地が買収され、採土のために伐採され、トラックの上る道ができ、全長89メートルの大前方後円墳であることが明確になった。そこで何とかしてその保存をはかり、関係者が集まり、直接また間接に工事者に交渉したが、はかばかしくゆかないうちに、年末にはブルドーザーが前方部の前端に入った。そのちかくで箱式石棺や石蓋土壙墓が、土とともに運び去られた。

昭和43年1月に、宇土市では遺跡を守るために「宇土文化の会」が結成された。しかし埋蔵文化財の保護法が厳重でなかった当時は、業者の開発を停止させることができず、前方部は東側から削られ、4月には前方部の東側が後円部近くまで採土されたので、宇土高校・第二高校

などで、前方の残存部を調査した。8月には前方部は全く失われ、後円部の頂上までブルドーザーが削った。そこで緊急調査が行なわれた結果、厳重な竪穴式石室のなかに巨大な舟形石棺を包蔵していることが分かり、宇土市の援助により本格的な調査をすることになった。

しかし何分経費が十分でないので、熊本日日新聞社長伊豆富人氏にはかり、同氏の厚意で「熊日調査団」を結成した。伊豆氏が団長、大和忠三宇土市長が副団長、私が調査隊長、富樫卯三郎氏が調査副隊長として、肥後考古学会、宇土市文化財専門委員会の有力メンバーが隊員として協力した。調査は44年9月13日から2週間行なわれた。処女古墳として、若い女性の人骨、鏡三面のほか、多くの鉄製品、玉類、布帛類が出土した。4世紀初期の弁天山・迫の上に対し、4世紀後期の古墳として、宇土半島基部の前方後円墳編年の上に重要な意味をもつことが分かった。

10年近く待望していた古墳の報告書が、今回富樫氏の手によって整理され、多くの専門家の意見を加えて刊行される運びになったことは、関係者の一人として喜びにたえない。

熊本大学名誉教授

松　本　雅　明

序

「向野田古墳発掘報告書」が、宇土市教育委員会の手で刊行された。まず執筆者をはじめ関係者の、長年のご努力を多としたい。

思えば向野田古墳の発掘は44年秋であった。熊本における考古学調査では、戦後最大の発掘とされ、郷土の古代史を書き改める端緒となっただけに、こうして調査がまとめられるものは意義深いものがある。

発掘に当たったのは熊日（熊本日日新聞…以下同じ）学術調査団であった。調査は9月13日から始まり、熊日と宇土市教委で調査団を編成、団長に伊豆富人氏（当時熊日社長）副団長に大和忠三氏（宇土市長）調査隊長に松本雅明氏（熊大教授）副隊長に富樫卯三郎氏（宇土高教諭）らの名が挙げられている。当日現地で結団式がなされた。

向野田古墳ではすでに大型の舟形石棺をおさめた石室が発見されており、県下でも類例のない古墳として注目されていた。しかし付近一帯の山で採土作業がなされ、古墳の崩壊が激しくなったため、緊急調査の運びとなった次第であった。

調査の成果については、報告書のなかで詳細に述べられているので省略し、当時の新聞報道から、調査をふり返ってみよう。

まず14日付けの熊日では「向野田古墳に学術のメス」と、調査団の結団式のもようが出ている。ついで15日付けでは「フタ石、石積みが出土」と、七枚の砂岩のフタ石や、石室を固める石積みが発掘されている。16日付けになると、これが「県下最大の石棺」であり、「石室構造はみごとなもの」との松本隊長の談話が付け加えられている。

16日は調査がクライマックスに達した日であった。石棺があけられるや、「完全な女性の人骨」と「中国製の鏡が3個」などが現われた。そして人骨の主の写真は五段、石室部の写真は3段に扱われている。記事はもちろんトップ五段である。戦後最大の発掘成果で、終日興奮が渦まいた現地のもようが、紙面にあざやかに出ていて興味深い。

石棺のフタがチェーン・ブロックで揚げられた時、なぜか一陣の風が吹いた。人々は異様な感に打たれた。まもなく人骨のほか、おびただしい副葬品が発見される。調査隊は万歳を叫んだし、あのときのことが昨日のような気がする。

新聞が大成果の内容を報道した日から、現地には見学者の列が続いた。近所の人はもとより、熊本県下や九州各地から見物客がつめかけた。一日で約700人、調査日程の10日間では7000人に及んだ、と新聞は伝えている。調査はまったく大成功であった。

ただ、ここで忘れてならぬのは、この大成功を導いたものが、地域住民の力であるというこ

とだ。地域の人々は、調査の一年前から、同古墳を崩壊から守るべく、「宇土文化の会」を結成した。

この会では熊本県や宇土市当局に対し、何度も保存を訴えた。また宇土高校生たちは、降雨のため墳頂部に大ヒビが入るや、必死で崩壊を防いだ。また調査に当たって、開発の事業主や地主がみせた好意の数々も、忘れることは出来ない。

21日付けの熊日社説で私は「文化財保護で行政の強化を」と題し、向野田古墳の発掘成果にふれるとともに、保護行政強化の要を力説した。調査を大成功に導いたのは、地域住民の文化財保護に寄せる熱意であるが、同時に行政がこれに対応せねば、国土あげての開発ブームに、文化財は危機に陥ると考えたからである。

あれから10年の歳月が立つ。文化財保護行政も、ずいぶん充実したものとなった。当時熊本県の文化財行政専門家は一人、関係予算は単県で200万円だった。これが今日では、新しく文化課が生まれ、スタッフは24人、予算（53年度）は2億3,400万円となっていて、隔世の感が深い。

向野田古墳の発掘調査が、文化財保護行政に果たした役割りは大きい。

熊本日日新聞社取締役（編集担当）

平　野　敏　也

序

熊本～肥後～火の国、いったいわれわれの古里はどこだろうか……。

近年、とくに宇土地方では従来の県史を再考せねばならないことが、つぎつぎに起りました。

〝火の国の発祥は宇土だった〟の説が、にわかに脚光をあびてきたのです。

それは、先頃出した宇土城跡（西岡台）の報告書により大溝をめぐらす高地性集落跡と、向野田古墳の被葬者は、若き女性であったことや、副葬品からしてこの王者こそ火の君では……、の見方が有力になったもの衆知のとおりであります。

ここに昭和42年に発掘し、以来永く研究をあたためられた向野田古墳の報告書が、関係者によりまとまり発表されることになりましたが、おそらく、関心ある方々の興味をひく事と存じます。

これからは、昨年10月末に発足した「宇城風土記の丘研究会」や、「宇土市史研究会」の方々に、是非、これが風土記の丘実現の中心的な役割を果たすことになりましょうから、関係者の研究のよすがと、更に市民各位にとりましても、ますます文化財の保護にご協力いただきますようお願い申しあげます。あわせてこの編集にあたられた関係者の熱意にも報いるべく、ここに深甚の意を表し、ごあいさつにかえさせて頂きます。

熊本県宇土市長

大　和　忠　三

例　言

1. 本書は熊本県宇土市松山町字向野田3978番～4020番に所在する向野田古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査（後円部）は熊本日日新聞社と宇土市教育委員会が別項の調査団を組織して昭和44年9月におこなった。
3. 調査にあたっては熊本県内はもとより、ひろく九州各県からの来訪があり、指導・助言を得ることができた。
4. 本書の執筆は富樫卯三郎が行ない、編集は富樫のほか平山修一・高木恭二があたった。
5. 本書に掲載した遺構実測図は発掘調査に参加した各員が作成し、遺物実測図と整図は富樫・平山・高木のほか、一部木下洋介氏・浦田信智氏の手をわずらわせた。
6. 付論として、各専門家による玉稿をいただくことができた。なおその中に掲載されている写真・図等は、各先生方によるものである。
7. 巻末の図版に用いた写真は、主に富樫・宇土市教育委員会が撮影したものである。
8. 出土した遺物は現在宇土市立図書館（昭和51年建設）に併設の郷土資料室に展示し、公開している。

目　　次

Ⅰ　調査の動機 …… 1
1.　はじめに …… 1
2.　開発と発見 …… 2
Ⅱ　古墳の立地と周辺の遺跡 …… 4
Ⅲ　調査の経過 …… 16
1.　前方部調査 …… 16
2.　後円部調査 …… 17
Ⅳ　墳　　丘 …… 24
1.　墳　　丘 …… 24
2.　墳丘実測 …… 27
Ⅴ　内部主体の構造 …… 32
1.　墓壙・石室・石棺 …… 32
Ⅵ　遺物の配列 …… 42
1.　棺外の遺物 …… 42
2.　棺内の遺物 …… 43
Ⅶ　遺物の観察 …… 46
1.　鏡　　類 …… 46
2.　玉　　類 …… 50
3.　車輪石 …… 57
4.　貝　　輪 …… 58
5.　鉄器類 …… 58
6.　土器類 …… 71
（付）　石蓋土壙 …… 102
Ⅷ　おわりに …… 105
1.　考　　察 …… 105
墳丘・墓壙・石室・石棺・副葬品・被葬者
2.　まとめ …… 133

付論　1.　向野田古墳の人骨について …… 北條　暉幸 … 157
2.　向野田古墳の貝輪について …… 菊池　泰二 … 158
3.　向野田古墳出土鏡について …… 堀　一夫 … 159
4.　向野田古墳出土車輪石・勾玉の石材について …… 井上　正康 … 165
5.　向野田古墳出土試料の分析 …… 実政　熟 … 166
6.　向野田古墳出土刀剣付着の鉄銹状材の樹種 …… 嶋倉巳三郎 … 168
7.　向野田古墳出土の薄片状物について …… 嶋倉巳三郎 … 183

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図……6
第２図　周辺地形図……25
第３図　墳丘測量図……折込み
第４図　字　図（部分）……28
第５図　墳丘企画推定図……30
第６図　竪穴式石室(1)……折込み
第７図　階段状遺構……33
第８図　竪穴式石室(2)……34
第９図　竪穴式石室(3)……折込み
第10図　竪穴式石室(4)……折込み
第11図　舟形石棺……折込み
第12図　竪穴式石室構築過程推定図……39
第13図　(上段)棺内・棺外遺物配置状態…折込み
　　(下段)棺外遺物出土個所番号……折込み
第14図　玉類出土状態……折込み
第15図　内行花文鏡……47
第16図　方格規矩鏡……48
第17図　鳥　獣　鏡……49
第18図　車輪石・玉類……52
第19図　鉄剣・鉄刀……折込み
第20図　刀　子　(1)……63
第21図　刀　子　(2)……64
第22図　刀　子　(3)……65
第23図　刀子(4)・鉄斧……66
第24図　埴　輪　(1)……79
第25図　埴　輪　(2)……80
第26図　埴　輪　(3)……81
第27図　埴　輪　(4)……82
第28図　土　師　器……85
第29図　石蓋土壙……103
第30図　枕石未製品……107
第31図　熊本県内前方後円墳分布図……150
第32図　スリバチ山古墳墳丘測量図……折込み
第33図　迫ノ上古墳墳丘測量図……151
第34図　楢崎古墳墳丘測量図……152
第35図　天神山古墳墳丘測量図……折込み
第36図　女夫塚古墳（男塚）墳丘測量図……153
第37図　弁天山古墳墳丘測量図……154
第38図　松橋大塚古墳墳丘測量図……折込み
第39図　国越古墳墳丘測量図……155
第40図　仁王塚古墳墳丘測量図……156

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表（高木作成）……7
第２表　宇土半島基部前方後円墳群編年試案（富樫作成）……14
第３表　検出葺石一覧表（富樫）……26
第４表　向野田古墳墳丘計測数値（富樫）……29
第５表　勾玉計測表（高木）……53
第６表　管玉計測表（高木）……54
第７表　小玉計測表（高木・木下・浦田）……56
第８表　刀子布痕の重ね枚数および繊維方向一覧表（富樫）……67
第９表　刀子出土個所別、布痕重ね枚数一覧表（富樫）……67
第10表　刀子計測表（高木）……68
第11表　埴輪片分類一覧表（富樫）……88
第12表　竪穴式石室分類表(1)（富樫）……108
第13表　竪穴式石室分類表(2)（富樫）……108
第14表　竪穴式石室分類表(3)（富樫）……109
第15表　関連石棺一覧表（高木）……112
第16表　図版からみたいくつかの車輪石一覧（富樫）……120
第17表　車輪石出土地名表（富樫・高木）……122
第18表　熊本県内前方後円墳地名表（富樫・平山・高木）……138
第19表　熊本県内埴輪出土地名表（高木）……144

図　版　目　次

図版1　(1)古墳遠望（西側より）
　　(2) 同　上　（前方部は消滅）
図版2　(1)古墳近影（西北側より）
　　(2) 同　上　（北側より）
図版3　(1)竪穴式石室（墓擴と粘土被覆）
　　(2) 同　上　（石室蓋石）
図版4　(1)粘土被覆南端の立石（南西側より）
　　(2) 同　　上　（南側より）
　　(3)墓擴北東隅の階段状遺構
図版5　(1)階段状遺構（南側より）
　　(2) 同　上　（西側より）
図版6　(1)竪穴式石室（石室蓋石除去）
　　(2) 同　　上
図版7　(1)竪穴式石室（西側より）
　　(2)棺外遺物出土状態（北側）
図版8　(1)棺外遺物出土状態（北東側）
　　(2) 同　　上　（西側、刀4）
図版9　(1)石棺蓋石出土状態
　　(2)石棺蓋石の矩形小孔
　　(3)石室控積状態（南西隅）
図版10　(1)棺内遺物出土状態（南側より）
　　(2) 同　　上　（北側より）
図版11　(1)棺内遺物出土状態（頭部付近）
　　(2) 同　　上　（腰部付近）
図版12　(1)棺内遺物出土状態（南端）
　　(2)棺内遺物除去後
図版13　(1)石棺内の枕石
　　(2)石室控積検出の枕石未製品
図版14　(1)石室東側壁
　　(2)石室北東隅側壁
　　(3)石室北西隅石積状態
　　(4)石室南西隅石積状態
図版15　(1)石棺南端部近影
　　(2)棺身と石室側壁
　　(3)石棺基底部と板石敷
図版16　(1)石棺蓋石正面（北側）
　　(2) 同　上　（南側）
図版17　(1)石棺蓋石側面（北側）
　　(2) 同　上　（南側）
図版18　(1)葺石・埴輪出土状態（後円部東側）
　　(2)葺石・埴輪出土状態（後円部墳頂）
　　(3)後円部南側、土師器(2)出土状態
図版19　(1)内行花文鏡　径17.1cm
図版20　(1)方格規矩鏡　径18.4cm
図版21　(1)鳥　獣　鏡　径11.8cm
図版22　(1)内行花文鏡鏡面（出土時）
　　(2) 同　　左　（現在）
　　(3)鳥獣鏡鏡面
図版23　(1)車輪石
図版24　(1)車輪石裏面（上）
　　(2)車輪石部分（下）
図版25　(1)玉　類
図版26　(1)鉄　剣
　　(2)鉄　刀
図版27　(1)鉄剣柄部（上から剣1・剣2・剣3・剣4）
　　(2)鉄刀柄部（上から刀1・刀2・刀4
図版28　(1)刀　子　1
　　(2)刀　子　2
図版29　(1)刀　子　3
　　(2)鉄　斧
図版30　(1)不明遺物
　　(2)貝 輪 片
　　(3)土 師 器
図版31　(1)埴　輪　1
　　(2)同　上　2
図版32　(1)埴　輪　3
　　(2)同　上　4
図版33　(1)石蓋土擴（側面）
　　(2) 同　上　（平面）
　　(3) 同　上　（蓋石除去後）
図版34　(1)東南より古墳を望む
　　(2)北側より後円部を望む（採土中）
　　(3)古墳より東南を望む
　　(4)古墳より西北を望む
図版35　(1)調査風景
図版36　(1)調査風景

向野田古墳調査団組織一覧

―熊日（熊本日日新聞社）学術調査団（役職は調査当時）―

団長	伊豆富人（熊本日日新聞社社長）
副団長	大和忠三（宇土市長）
	島田四郎（熊日専務）
隊長	松本雅明（熊本大学教授）
副隊長	富樫卯三郎（宇土高校教諭）
調査員	坂本経堯（肥後考古学会長）　原口長之（県文化財専門委員）　佐藤伸二（熊本大学助手）　井上正（宇土市文化財専門委員）　古田一英（肥後考古学会員）
調査補助員	宇土高校社会部ＯＢ　敷島安人・佐藤哲三・中野章・平山修一・髙木恭二・井上洋一 宇土高校社会部（部長　沖村　徹ほか） 九州学院考古学部（部長　山下敏文ほか） 第二高校考古学部（部長　津村隆司ほか）
地元協力者	山村一夫・尾崎信義・緒方増男・緒方正一
調査協力者	三島　格（福岡市文化財主事）乙益重隆（熊本女子大学教授）　田辺哲夫（県文化財専門委員）　隈昭志（鹿本高校教諭）　杉村彰一（同）　田添夏喜（玉名市文化財委員長）　松本安雄（県教育庁）　上野辰男（同）　緒方　勉（肥後考古学会員） 東　光彦（熊本市立博物館）　桑原憲彰（県教育研究所）　平岡勝昭（肥後考古学会員）　江上敏勝（八代市教育研究所）　富田紘一（熊本市立博物館）　石原幸男（宇土高校教諭）　枝森久一（三角町文化財協力委員）　西原昭明（宇土文化の会）清見末喜（宇土文化の会） 山崎純男・石橋新次・板楠和子・岩井瑞穂
調査事務	宇土市教育委員会社会教育課（主事）　本郷裕幸・萩原明彦